



Data

監督・脚本：フェリックス・ハーン
グレン

脚本：ハンス・インゲマンソン

原作：ヨナス・ヨナソン『窓から逃げた100歳老人』（西村書店刊）

出演：ロバート・グスタフソン／イヴァル・ヴィ克蘭デル／ダヴィド・ヴィバグ／ミア・シュリンゲル／イェンス・フルテン／アラン・フォード／ラルフ・カールソン

👁️👁️ みどころ

スウェーデンは人口900万人の小国だが、そこで100万部を売り上げたヨナス・ヨナソン原作の『窓から逃げた100歳老人』を知ってる？

中国映画『グォさんの仮装大賞』（12年）は老人ホームから「大脱出」した老人たちのロードムービーだったが、本作はたった1人の老人の脱出劇。しかし、100歳の老人が回想する、世界を股にかけた体験談は「ええ、ホントー！？」と叫びたくなるほどスケールのデカイものだ。

スペイン内戦からマンハッタン計画、東西冷戦から二重スパイまで、何とも壮大な、ハツタリのようなホントの物語を、しっかり楽しみたい。



■□■ 100歳の老人万歳！その脱出先は？ ■□■

2013年4月に村上春樹の『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の旅』が発売されるや一大ブームを引き起こしたから、村上春樹文学は今や日本人は誰もが知っている。しかし、あなたはスウェーデンで大ヒットしたという、ヨナス・ヨナソンの小説『窓から逃げた100歳老人』を知ってる？本作は冒頭、そんな原作のタイトルどおり、スウェーデンの町マルムシェーピングの老人ホームに入っているアラン・カールソン（ロバート・グスタフソン）が、記念すべき100歳の誕生日のその日に窓から老人ホームを逃げ出すシークエンスが描かれる。

トボトボと駅まで歩いた彼は、ポケットのあり金をはたいて3分後に出発するというバスのチケットを購入したから、脱出に大した目的は持っていなかったようだ。本作は、ハプニングの連続で笑わせてくれる映画だが、最初のハプニングは、トイレに入ろうとした

若いギャングから、トイレに入り切らないため「一時預かり」した大きなスーツケースをアランがそのままバスの中に持って入り出発してしまうこと。トイレから出てきたギャングはカンカンだが、さてアランはどこへ行ったの？そして、トランクの中には何が入っているの？そもそもアランは、なぜそれを泥棒のように持って行ったの？ひょっとしてアランは、物事の是非の判断が出来ない強度の認知症？これは、長寿社会日本で現在社会問題になっている徘徊の一種？いやいや、意思力の強そうなアランの目を見ていると、そうではなさそうだ。

中国映画『グォさんの仮装大賞（飛越老人院／FULL CIRCLE）』（12年）は、第六世代監督・張楊が、天津で開催される仮装大会へ出場するため、大量の老人たちが「老人ホーム」を大脱出する姿を描いた面白い映画だった（『シネマルーム32』62頁参照）。それに対して、本作はたった一人だけの、動機も不明の老人ホームからの脱出だが、以降の展開を観ていると思わず、アランという100歳の老人万歳！ところで、アランは一体どこへ行くの？

■□■恐いものなし、失うものなし、悠々自適の旅はどこへ？■□■

本作は、老人ホームを脱出したアランの、現在と彼が辿った過去の面白いエピソードをスクリーン上に綴っていく構成になっている。そして、100歳のアランの「現在の旅」の特徴は、まさに恐いものなし、失うものなし、悠々自適の旅になる。

たまたまの偶然でアランと現在の旅を共にするのは、第1にビーリングというバス停の閉鎖された駅舎で暮らす70歳の男性ユーリウス（イヴァル・ヴィ克蘭デル）。第2に半分強奪のような形でアランたちが車に乗せてもらった、気弱なインテリ青年のベニー（ダヴィド・ヴィバーク）。そして第3に、緑豊かなシェートルブの村でサーカスから強奪してきたゾウと一緒に暮らしている風変わりな女性グニラ（ミア・シュリンゲル）の3人だ。ゾウの名前はソーニャ。世の中にロードムービーの名作は多いが、100歳の老人を中心とし、ゾウを連れたロードムービーは本作がはじめてだ。

アランが勝手に持ってきたスーツケースの中には、何と5000万クローナもの大金が入っていたから、それを血眼になって探すギャングのボス、ピム（アラン・フォード）とその指示を受けてアラン達を追う若いギャング、イエッダン（イェンス・フルテン）との対決を余儀なくされたのは当然だが、100歳になっているアランには、それも“柳に風と受け流す”自由さがある。5000万クローナのカネを追うのは、アーロンソン警部主任（ラルフ・カールソン）も同じだが、途中でイエッダンの死亡事件（殺人事件）が発生すると、捜査方針も大きくサマ変わり・・・？たまたま老人ホームの窓から逃げ出した100歳の老人アランたち4人による「現在の旅」のおかげで、ギャングも警察も引っかき回されるストーリー展開は、そりゃもうメチャ面白い。

■□■アラン少年の「趣味」は？アランの最初の旅は？■□■

2014年は第1次世界大戦がはじまった1914年から100周年にあたるため、新聞各紙はさまざまな特集を組んだ。すると、現在100歳のアランの少年時代は？日経新聞には「私の履歴書」、読売新聞には「時代の証言者」、朝日新聞夕刊には「人生の贈りもの」等、「功なり名を遂げた」老人たちの自慢話(?)をまとめる連載モノがあるが、スクリーン上で展開されるアランの自慢話(?)は、決して誇張ではなく真実の物語だけに実に面白い。

共産主義者だった父親が、ロシアにわたり、革命運動に従事する中で命を失うストーリーはあまりにもあっけない。しかし、その体験が、その後病に倒れた母親が残した「考えても無駄よ。人生はなるようにしかならない」という言葉と強く結びつき、アランの生涯の人生訓になったというストーリーは説得力がある。天涯孤独になったアラン少年の最大の「趣味」は爆発物の実験というから、かなりヤバイ。そのお陰で精神病院に入院させられるという迫害を受けたものの、打倒ファシズムに燃えるラテン系青年のエステバンと共に「スペイン内戦」に義勇兵として参加すると、そこは彼の独壇場に・・・。

ところで、あなたはヘミングウェイ原作の映画『誰が為に鐘は鳴る』(43年)を知ってる？アメリカから義勇兵としてスペイン内戦に参加したゲーリー・クーパー扮するロバート・ジョーダンは、イングリッド・バーグマン扮する現地ゲリラの娘マリアと恋に落ちつつ、日毎励んだのが橋の爆破だった。本作を見ると、アランもそれと同じような活動に没頭していることがよくわかる。アランがロバートと違うのは、ロバートは義勇兵のために、そしてマリアのために名誉の戦死を遂げたが、アランはひよんなきっかけでフランコ將軍(コルド・ロサダ)を爆発から救ってやったため、フランコ將軍のお友達になってしまったことだ。これが若き日のアランの過去における最初の旅だということから、恐れている。

■□■スケールのデカさにビックリ！第2次世界大戦中は？■□■

それってホント？誰かのホラ話ではないの？100歳になったアランの過去の旅は、とにかくスケールがデカイ。以降も続く、アランの過去の旅では、①ソ連共産党書記長のヨシフ・スターリン(アルギラダス・ロムアルダス)、②アメリカの第33大統領ハリー・S・トルーマン(ケリー・シェール)、③アメリカの理論物理学者ロバート・オッペンハイマー(フィリップ・ロッシュ)、④ソ連で1990年に初の大統領となったミハイル・ゴルバチョフ(シギタス・ラッキーズ)、⑤アメリカの第40代大統領ロナルド・レーガン(キース・チャンター)らとの交友の姿(?)が次々と登場するから、そのスケールのデカさにビックリ！

フランコ將軍と別れたアランはスペインからニューヨークへ。日本軍による真珠湾への奇襲攻撃は1941年12月8日(日本時間)だが、その時アランはアメリカで働いていたというからビックリ。しかも、爆発物への興味を失わないアランだから、世界最大の新型爆弾を造るというマンハッタン計画に興味を示したのは当然。その結果実現したのが、

原爆の最終工程に頭をひねっていたロバート・オッペンハイマー博士に、アランが持ち前の知識を披露したことから始まった2人の交流だ。アランはアメリカ初の原爆実験にも立ち会ったほどだから、その重責ぶりがよくわかる。

■□■東西冷戦時代から収容所脱走まで、アランの活躍は？■□■

原爆開発の労をトルーマン第33代大統領から称えられたアランは、感謝の印として贈られたライターを手に母国スウェーデンに戻ったが、そんな卓抜した能力の持ち主を東西冷戦の時代に入ったソ連が放っておくはずがない。アランに近づいてきたソ連の物理学者ポポフとアランの前には、何とソ連の潜水艦が浮上。そのまま艦内に入ったアランは、クレムリンで時のソ連共産党の書記長であり、独裁者として君臨するスターリンと対面したから、すごい。もっとも、そこで適当に原子爆弾の話でもしておけばアランも尊敬されたのだろうが、大量のウォッカを飲んだアランの失言によって、事態は最悪の方向に。

ソ連の強制収容所に入れられてしまえば、その脱出が不可能なことは五味川純平の原作を映画化した『人間の條件』全6部作（59～61年）『シネマルーム8』313頁参照）を観れば明らかだ。ところが、何かと要領の良いアランは収容所で知り合ったアルバート・アインシュタイン博士の弟であるヘルベルト・アインシュタイン（ダヴィド・シャックルトン）と共にそこを脱出し、今度は1968年の「五月革命」真っ只中のパリを訪問することに。一体アランの活躍の場はどこまで広がっていくの・・・？

■□■パリでの活躍は？モスクワでは二重スパイ？■□■

本作は決してスパイ映画ではないが、「五月革命」中のパリで、アランが外務大臣の通訳はソ連のスパイだと見抜くストーリーを見ていると、アクションこそないものの、その展開はスパイ映画顔負けの迫力がある。さらに、CIAパリ支局から事情聴取を受けたアランがアメリカのスパイとしてモスクワに赴いたり、逆にソ連の旧知の友人ポポフにその事実を打ち明けると、アランは今度はソ連のスパイとして活動することになったり、アランの生き方は変幻自在だ。すると、ひょっとしてアランは完全な二重スパイ？

東西冷戦時代を終わらせるべく動いた指導者は、アメリカは第40代大統領レーガン、ソ連はペレストロイカを主導し、1990年にソ連初の大統領となったゴルバチョフだが、何とアランはこの2人にスパイとして仕えながら東西冷戦下の国際社会で暗躍したというから、その活動の広さは「007」ことジェームズ・ボンド以上だ。しかし、それってホントの話・・・？

常にそんな疑問がつきまとうが、100歳になってもギャングと警察の追跡をものともせず、飄々とユーリウス、ベニー、グニラそして象のソーニャを連れた旅を続けているアランの姿を見ると、きっとそれはホント・・・。

■□■ 100歳を超えて、なお自由な旅を！ ■□■

100歳を超えて、なお社会的な活動を続けている日本人と言えば、何といっても2014年10月4日をもって御年103歳になられた日野原重明医師だが、本作のアランを見てみると、その活動の自由さ（奔放さ）は日野原医師以上だ。2014年に弁護士生活40年となった私は「24時間仕事、24時間遊び」をモットーに、できるだけ何ものにも縛られない「仕事と遊び」を目指しているが、アランの目から見れば、そんな65歳の私など「漢垂れ小僧」のようなものだろう。

アランの自由な旅の障害になるのは、何といっても5000万クローナの大金が入ったトランクを持ち歩いていることだが、アランがこれに執着心を示したことが1度もないのが面白い。また、アランはユーリウスとの旅を始めた最初に、スーツケースを取り戻そうと乱入してきた男ブルテンをハンマーでノックアウトさせたうえ、冷凍庫に入れ、結果的に殺してしまうことになったが、これも特に気に留める様子はなさそうだ。ブルテンの死体をアフリカ行き貨物船の積み荷の中に放り込んだ行為は、殺人罪の他、明らかに死体遺棄罪、証拠隠滅罪に該当するが、それすら気にせず飄々と旅を続けることができるのは、さすが歴戦の強者だ。100年間も生きて、あれだけの旅をし、あれだけの体験をしてくれば、もはやアランにとっては怖いものなど何もないだろう。しかし、現実には現実。アランたちを追ってきたギャングのイエッタンは象のソーニヤの下敷きにされて死んでしまったが、イエッタンがぶっ放した拳銃の弾はソーニヤのお尻を貫通したから、現場に残された血液採取を通じて、アーロンソン警部主任（ラルフ・カールソン）の捜査も少しずつ進展していくことに。

ちなみに、『グオさんの仮装大賞』では、主人公は「仮装大会」での名演を最後に息を引き取ったが、彼を含む多くの老人たちの老人ホームからの脱出と奇想天外なロードムービーは、何とも人間らしいものだった。しかし、警察の包囲網が狭まっていく中で、アランたちの自由で悠々たる旅の行方は・・・？それは、あなた自身の目でしっかりと。

2014（平成26）年10月10日記